

## 市場主義者の主張は マントラ（呪文）のたぐい

佐和隆光「市場主義の終焉」  
(2000年10月, 岩波新書)

景気低迷が長期化する中、日本経済の「不治の病」を癒すには経済構造改革が必要であるということで喧伝されているのが日本経済の市場主義改革です。即ち、日本型制度・慣行を「アメリカ型」に作り替え優勝劣敗の市場競争を行わせることが日本経済を甦らせる唯一の方策であるというものです。

著者は、これら「絶対市場主義者」の主張を、「科学的な論証なり実証なりを一切経ていない」という意味で、マントラ（呪文）のたぐいと断じています。例えば、「累進所得税制は勤労意欲を減退させる」との命題については、累進度が相対的に高い日本の勤労者は、それが低い米国の勤労者と比較して勤労意欲が乏しいことを統計的に実証する必要があるが、それは不可能だろうとしています。

また、市場主義という思想は目新しいものではなく、19世紀の英国において隆盛を誇ったものの、1920年代の世界的大恐慌の中、政府の市場介入を必要とするケインズによって否定された（「自由放任の終焉」）ものであったのが、1970年代に入り、オイルショック後の財政赤字の拡大、社会主義への幻滅といった事情を背景に、サッチャー政権・レーガン政権（我が国では中曽根政権）下で「復古」したものであることを指摘しています。

そして現在、市場経済化の動きは、グローバルな規模で更に進められつつありますが、著者によると、グローバルな「市場の失敗」は国内の「市場の失敗」よりも深刻であるとし、その理由として、「ルール違反を監視し処罰するWTOはあっても、国家間の初期条件の格差を是正するための措置を講じる『政府』に当たるものが存在しない」ことをあげています。また、WTOのルールは資本主義の「均質化」を求めるものですが、多様な資本主義が共存するためには「資本主義多元主義とでもいべき思想」の確立と「公正の公準」を明確化すべきであるとし、さらに、地球環

境問題への対応等も視野に入れつつ、「グローバル資本主義のガバナンスをつかさどる国際機関の創設」の必要性を指摘しています。

ただし、ここで留意しなければならないのは、著者は市場主義改革の必要性そのものを否定しているわけではないことです。それどころか、「日本の市場経済が不自由、不透明、不公正であることは、もとよりいうまでもあるまい」とし、それを自由、透明、公正なものにつくりかえる「市場主義改革の断行は何にも増して優先されなければならない」と強調しているのです。

その上で、市場主義改革を遂行し効率性を確保しつつ、公共性を重んじる公正な社会の実現を同時に目指すべき（市場主義と反市場主義を止揚する「第3の道」の追求）と言うのが、著者の主張です。

なお、大学を念頭に置いたものですが、社会科学研究者の存在意義についても言及があり、それは「政治や経済の現状への警鐘を専門的立場から打ち鳴らすことであって政府の政策を正当化することではない。その意味で、社会科学者は総じて現状批判的にならざるを得ない」としています。

(りえぞん No.11, 2002/1/23)

## 経済学は何とつまらない学問であろうか

飯田経夫著「経済学の終わり」  
(1997年11月, PHP新書)

本書執筆中、友人にこのようなタイトルをつけるつもりだと話したところ、友人からは即座に、「それこそ（飯田経夫という）『経済学者の終わり』だ」と反対されたというエピソードが「あとがき」のなかで紹介されています。

我が国近代経済学界の重鎮の1人である著者は、この「鬼面人を驚かす」ような標題に何を託したのでしょうか。

著者は、近年、経済学者の多くが展開して

いる市場メカニズム重視の「改革論」が全く気に入らないようです。確かに市場経済はかけがえのない優れた仕組みですが決して完璧なシステムではなく、その欠陥を是正するのが経済学の役割であると言うのです。経済学は社会哲学（「よき社会」とはどのようなものかを考えること）でなければならないというのが著者の持論です。

しかるに、現在の多くの経済学者は『バカのひとつ覚え』のように『規制緩和』という名の『改革』の必要性を絶叫し続けて」とし、端的な例として「民営化論」を俎上に載せます。著者はこれを、ほとんど全ての事業はカネ儲けの対象となることが前提の議論であるとし、全てをカネの話に還元してはばからない「拝金主義」であると軽蔑しています。その一方で、著者はバブル期以降の日本社会及び日本人にも失望と怒りを覚えているようで、「日本人の倫理感のみじめなまでの衰退」と「日本の諸組織における規律の恐るべき弛緩」を是正するためには、むしろ「規制の強化」こそが必要不可欠としています。

著者は、「この世には、およそカネ儲けの

対象とならない、カネに換えられない重要な価値というものがいくつかあり、経済的に豊かになるほどその重要性は高まる」と主張し（それを否定するのは「人間性に対する許しがたい冒とく」であると断じています）、その例示として都市のアメニティや美観、地球環境等を掲げています。そして、これらの価値を保持していくには「市場メカニズムに委ねることは論外」で「高度の計画性と素晴らしい知恵が必要」とあり、この観点から政府の役割にも言及されています。

さらに、たくましい日本経済を支えてきた基盤には「システムとしての日本」（長年にわたる日本人の伝統・慣習・体験・智恵が結実したもの）があり、「一時の血気にはやって破壊してはならない」と強く訴えます。

いずれにせよ、現代の経済学（者）に対し著者は「どこか歯車が決定的に食い違っているのではないか」と結論づけており、それは「ある種のペシミズムだと言わざるを得ない」というのが偽らざる心情のようです。

（りえぞん No.12, 2002/2/6）